

6月自然教室だより

奈良公園南部、白豪寺周辺

山本 美智子

6月27日(月)9時30分、破石バス停に参加者15人が集合し、田代貢先生の案内で出発。

まず、先生特製の資料をいただく。観察会地図には道路、溝、人家の庭先、公園の池の中までぎっしりと観察予定植物が書き込まれている。先生のよく通る声は、通りの駐車場横に植えられている‘シラカバ’に注目。花穂を割り中身をルーペで観察。緑色と茶色の細かな粒を手にする。緑はめしべを包んでいた苞で葉の変形。茶色は果実(そう果)で薄いヒレが付いており風で飛びやすくなっている。道路際のフェンス越しの‘栗’は落ちていた果穂を観察、花の付き方、構造、果実の形を考えてみる。イガが葉の変形であるのを知る。



(シラカバの観察)

住宅の塀の上を見上げ、足元を指してシュロとドクダミ、ツユクサの葉だたみに注目。扇だたみ、内巻きだたみ等、葉が開く前の折りたたまれている様子を観察。食害から身を守る植物では、葉から白い液を出すナンキンハゼ、鋭い棘で備えるカラスザンショウやアメリカオニアザミを見る。‘ビーナスの姿見’と言われているヒナキキョウソウとキキョウソウを探しあて、種子の出る穴があるのがヒナキキョウソウ、やや大きいキキョウソウは横にある。手にとってルーペでじっくり見る。

ヨウシュヤマゴボウ、ヘクソカズラ、シンジュの単軸分枝と仮軸分枝も学ぶ。

あまりの暑さに新薬師寺前で小休止。冷果の差し入れを有難く感謝して頂く。



(池の中のヒシの観察)

ザクロの観察時に花の色、形、味、大きさも鳥に見つけてもらい食べられるように進化したことを学ぶ。

動けない植物では、クサギの観察で、太陽光を受けるため葉の転回や長短を工夫している事も学習。東山緑地ではマテバシイ、ヒノキバヤドリギ、さらに池の中のヒシを観察。

最後の‘イ’の観察では、長く伸びた畳表に利用されている部分は花の軸。花から上の軸に見えるのは苞。葉は根元近くにあり目立たない。軸の中は白い芯が詰まっていた昔は燈心として活用され、故に別名‘燈心草’といわれた。



(お疲れ様でした)

‘自然が語りかけてくる声を注意深く聴き動けない植物の知恵を知り、観察活動が続けることで新たな発見がある’

次回は8月8日平城京跡で燕の埒入り観察です。